

書籍と申すものは、世の中の人々の言うように、まことに便利で有難いものではあるが、どうも気味の悪いものでもある。

このような告白は畢竟するに、僕自身の精神力の弱さと才能の薄さとの告白になるだけである。しかし、お恥かしい話だが、僕は未だかつて一冊の本を読了した時に、「己は完全にこの本を読み終えたぞ」という感慨を抱いたことがないから仕方ないのである。いくらアンダーラインをしたりノットを取って丹念に読んでみても、あるいは、そんなことをするから著者の精神がわからぬのだから、ノートなど取らずに絶えず呑んだ気になつてやれ、と思ひながら読み通しても、いずれにしても何か読み残してはいまいかという不安に必ずつきまとわれるのである。そして、読み返してみると、必ず新しいことを読み取るのを普通とする以上、事実僕は常に何かを読み残していることになるのである。昔から「眼光紙背に徹する」^A人々がいるようだが、まことに羨ましい限りだと思ふ。僕などは、結局「眼光紙面に彷徨する」^B族であろうと思つてつくづく悲観している。

しかし、半分慰めになるような、あるいは、さらに僕を悲観させかねないような、一つの人間の事実が読書には介在するもの^Cのようなのである。これはわかりきつた常識的事実ではあるうが、本来我々の持つてゐる問題の量や質が我々の認識の量や質とを決定するものであり、我々が少し反省してみると、「我々にわかることしか、あるいははわからうと望んでいるものだけしか、我々にはわからない」というはなはだ寒々とした真実に突き当たるものの上である。そして、我々の持つ問題とは我々の生活や生理や年齢やその他色々なものの変化につれて変身化態して行くものである以上、一つの書物を読むに当たつても、必然的に読み残しがあることも当然だと言ふことになる。つまり、読書に際して僕の持つていた問題に應ずるだけの理解しか得られないのが当たり前になり、読み残しが必然的に存在し、完全に読んだという感情を持たないのも当然であつて、それを概くのは神経衰弱の徴候だとも考えられるのである。しかしまた、そうしてみれば、一冊の書物というものがいよいよ気味が悪くもなり、一本書物というものは何物だらうと考え、そのプロテウスの変貌可能性にますます畏怖の念を覚え、モンテーニュという人のひそみにならつて、人間も書物もまことに「浮動常なく多様な」ものであるわいななどと、あきらめかねたような

吐息を洩らすしだいである。昔読んだ本などを、何かの用で調べるために繙く場合など、仰々しく引かれた傍線の箇所がのつべらばうな顔になり、かえて傍線も何も施してない行文の間に、鮮明なまた親しみのある表情が浮び上がって来ることが僕にはしばしばある。そして、現在読んでいる書物を「不可解な愛人」を眺めるように打ち眺めながら、何とも言えない心細さを感じるのが常である。これは、僕一個人の告白的似而非理論であるが、僕以外の人間にも当然同じ現象があつてもかまわぬはずだと考えると、これまた同類・同罪意識によつて一時僕は卑怯にも慰められるけれども、たちまちさらに深い気味悪さを書物に対して抱かざるをえなくもなるのである。つまり、読者の複数性のために、書物は、いよいよもつて「浮動常なく多様な」読まれ方をするにもなりうるからである。僕はかつてある外国の小説を翻訳したが、その小説の中に、作中の人物（作者が愚弄しきつている人物）が表面は如何にももつともらしく、しかし実際は出鱈目な文学論をする場面があつた。ところが、僕の翻訳を読んで下さった方が、ある新聞にブック・レビューをされるに際して、その出鱈目な文学論を作者の文学観として非常に推賞しておられたのである。僕は、一時、大いに悲観もし憤慨もしたけれども、他人のふり見て我がふり直せと思ひ返し、いよいよますます書籍というものの気味悪さに撃たれてしまったのである。結局のところ、マラルメという詩人が考へたように、作品（書籍）は出来上がつたら最後、作者のものではなくなり、万人の所有に属し、しかも誰の所有にも属さぬ独自の生存を獲得するものなのである。譬えて言つてみれば、書籍と申すものは、不可思議な現象液のようなものであつて、読者各自の精神の種板にあらかじめ写しおかれた影像を現像してくれるものなのだろう。作者がその作品に善意をいくら籠めても、作品は独自の営みを続け、案外不善意な結果をある読者に及ぼすこともありうるかもしれないのである。

モンテーニユは、その『エッセー』の第一巻第二十四章で、次のようなことを言っている。「有能な読者は、他人の書いたものの中に、作者がこれに記しとどめ、且つこれに具わつていふと思つたものとは別個の醍醐味をしばしば見出して、これに遥かに豊かな意義と相貌とを与えるものだ」と。つまり、眼光紙背に徹して作者の面目を隈なく理解するのみならず、それ以外のことをわかるといふ意味なのであろう。つまり、作者が現象液に予定しなかつたような作用を有能な読者はその現象液をして行なわしめるという意味であらう。もちろんこれは、一冊の本を全く見当違いをして読んで作者の意図を故意だと思われる

くらい誤解するとか、倫理の書籍の中から盗賊の自己防衛の具を読みとるとかいうことが有能だと言っているのではないことは明らかである。一冊の書籍を読むに当たっても、その人の当面の問題のみならず、心中に潜んでいたあらゆる間道が濃淡さまざまあろうが一樣に浮かび上がって来て、みな大鳥籠内の小鳥の群のように囀り出すというような心境ではないかと思う。そして、現在の新聞紙のように模範的な希薄さを持った現象液でも、有能な読者は各自の強力剤を用意してなかなか深い読み方も出来るというわけになる。こういう具眼の読者になることはなかなか容易な業ではなく、畢竟するに、我々がなるべく多くの問題を常に生き生きと用意しておけるようになることが必要となるのであり、そのためには、「遂に己は本を読み能わぬのだ」などと泣き言は吐かずに、読めば読むほど新しくなる気味の悪い書物をいよいよ愛しますます読まねばならぬものなのだろう。

注(*)

プロテウスⅡギリシャ神話で、海に住む老人。ポセイドンの従者。予言と変身の術に長じた。

種板Ⅱ写真の原板。乾板。

問一 筆者は自らを〔B〕といっているが、その意味を〔A〕と対比しながら説明せよ。

問二 傍線部(1)は何をさすのか、本文に即して述べよ。

問三 傍線部(2)について、筆者はなぜ書籍を不可思議な現象液のようなものというのか、説明せよ。

問四 傍線部(3)の「有能な読者」と「現象液」との関係はどのようなものであるか、わがかりやすく説明せよ。

(渡辺一夫「書籍について」より)

問五 書籍が「気味の悪い」ものであるという筆者の考えを、簡潔に要約せよ。

次の文は、作者が自分の小学校時代を回想した小説の一節である。これを読んで後の間に答えよ。(五〇点)

学校へあがつた私にぼやぼやとした幾日がたつた。そこへ最初の大事件が起つた。ある日最後の時間をすませ靴かばんをかけて門まで出たら、ぱらぱらと雨が落ちてきた。雨といふほどではなし、大抵家が近いので仲間の者どもは平気で帰つてゆく。なかには雨だ、雨だ、と仰山まよっさんに騒ぎたてて韋駄天だてん走りをしてゆく奴もある。ところがかねがね、急に雨がふつてきたら濡れて帰らずに学校で待つてるやうに、おばさんがきつと迎ひにゆくから、と懇々こんこんいひきかされてた私は——伯母さんはこの弱い子を一粒の雨にもあてまいとしたらしい——足どめにかかつたみたい⁽¹⁾に立ち竦すくんでしまつた。お友達はみんな帰つた。上級の生徒も私などには目もくれずそろそろ帰つていつた。姉たちのはうは先にひけたとみえて姿が見えない。一足遅れて先生も平気で帰つてゆく。平気でないのは私だけだ。学校がしんかんとしてきた。だのに伯母さんは待てどくらせど迎ひにきてくれない。で、もうかもうかと坂の上のはうを見ながら途方にくれてるところを、小使のおかみさんが見つけた。門でもしめにきたのだつたか。家の近いことは知つてるから、早く帰るやうにすすめたにちがひない。が、私は伯母さんのいひつけを守つていづかな動かない。かまはず帰ればとうの昔家にあるじぶんだのに、表に立つてるもので、いくらばらばら雨でも濡れてくる。それよりも私のはうがやがて大雨になりさうな模様だ。⁽¹⁾

おかみさんが手こずつてるところへ、運悪くひとり遅れて出てきたのが二、三年上級の女の子だつた。おかみさんは私たちの帰り路が同じだといふことを知つてたのだらう。幸ひその子が傘をさしてたもので、私を入れていつてくれるやうに頼んだ。見たところからも、いやといへるやうな子ではなかつたらしい。高等二年——今の六年——までは席は左右に分かれながら男女共学だつたけれども、さうした危急存亡の場合でさへ相合傘などはもつてのほかなので、仲間に見つかつたが最後い物笑ひになる時代だつた。その子は迷惑至極だつたらうが、おかみさんに押されてはひる私を黙つて傘に入れて歩きだした。どちらも息をこらして足もとを見つめたまま、我にもあらず足をはこぶ。旧幕時代引廻ひきまはしにあつた咎人とがにんの気もちは、たぶんこんなだつたらう。やつとの思ひで家の近所まできたときに、妹の乳母が迎ひにくるのに逢つた。私はありがたうとお礼をいはされたらう。いはされなければいへなかつたにきまつてゐる。乳母はあいそよく礼をいつたが、先もろくに返事ができなかつたらしい。⁽²⁾その時の様子はいつまでも乳母の愉快な思ひ出話になつた。帰つて私は伯母さんに苦情をいつたにちがひな

い。⁽⁴⁾伯母さんが忙しかつたからばあやに代りにいつてもらつたといふのを、兄がはたから、父が迎ひにやらなかつたのだ、とすつばぬいた。それは、私といふ意気地なしが自分でどう分別するかを試みるために、わざとさうしたのだとわかつた。それはわかつたとしても、よし善意からにせよ約束が守られないことがあるといふ、家の者に対する不信用のこれが最初のものとなつたであらう。

中学の三年頃だつたか、英語の教科書に誰か名のある詩人の短い詩がのつてゐた。こちらは中学生でも、むかうでは小学校の教科書だらう。帽子をまぶかに被つたうつむき加減の男の子に寄りそつて、その顔をうかがふやうに可愛い女の子が歩いてゐる。舞台はぬるでの木のある学校の前庭かなにかで、長年生徒の靴にすりへらされた床とかかま櫃とかいふ文句があり、学期のはじめでもあらうか、彼女が彼に、自分の席次が彼より上になつたことをすまなく思ふ、と詫びてるところだつた。私の記憶も歳月にすりへらされてしまつたが、そのうち彼らは結婚しめでたく天寿ををへて冷たい墓石になつた、といふやうな話だつた。とかく無味乾燥な教科書のなかのこの話は、特にそれが詩であるためにひどく私を喜ばした。そして私どものそれにひきくらべて、自由で幸福な彼らの少年時代の生活が深く印象に残つた。

(中勘助「こまの歌」より)

問一 傍線部(1)について、このときの「私」の気持ちを説明せよ。

問二 傍線部(2)について、なぜ「運悪く」と言っているのか、説明せよ。

問三 傍線部(3)で、乳母はなぜ「愉快」と感じたのか、説明せよ。

問四 傍線部(4)について、このときの伯母さんの気持ちはどのようなものか、説明せよ。

問五 傍線部(5)について、「自由で幸福な」とはどのようなことを言っているのか、具体的に説明せよ。

次の文章は、中世の物語『しのびね』の一節である。女主人公の姫君は、ふとした機会に内大臣(ここでは殿とよばれる)の子、四位中将という貴公子と結ばれ、男の子(若君)にも恵まれて幸福であったが、二人の仲を喜ばない内大臣は、息子の中将に権勢家の娘との結婚を強要し、中将もそれを受け入れざるを得なかった。それを知って悩む姫君が、さらに中将から、内大臣が若君を自邸に引き取って育てることになったと告げられる場面である。よく読んで後の問に答えよ。(五〇点)

姫君は、をこがましく、さのみ思ひ沈みて見え奉らじと、さらぬ気色にもてなし給へど、心に思ふこと、⁽¹⁾ などが見えざらん。^{*}殿は、若君迎へ奉らんとて、日まで定め給へば、「これさへなくて、なほいかにつれづれならめ」と、⁽²⁾ いたはしく思す。また「若君を見給ひては、母君のことを、さのみなさけなく思し捨てじ」と思へば、⁽³⁾ かつはうれしくて、「あこをこそ迎へんとのたまへ。さ心得給へ。御つれづれこそ心苦しかるべけれ」とのたまへば、またこれさへかなしくて、生まれ給ひし日より、片時立ち去ることもなくて、ならひ給へば、恋ひしかるべけれども、殿へおはしては、人となり給はんもよきことと思しな⁽⁴⁾ ざめて、御装束などこしらへ給ふ。

^{*}明日とての日は、もろともに例のつきせぬことどものたまふ。姫君は、若君を御膝におきて、たださめざめと泣き給へば、御顔うちまもりて「何⁽⁵⁾を泣き給ふぞ。小車のほしきか」とて、うつくしき御手にて、御涙をかき払ひ給へば、せんかたなくかなしくて、「あこを見るまじきほどに、恋ひしからんことを思ひて泣くぞ」とのたまへば、⁽⁶⁾ 「など見給ふまじき。よくも見給へ」とて、御顔さしあて給へば、忍ぶべき心地もせずむせかへり給へば、中将も涙にくれて、ものものたまはず。

注(*)

殿||内大臣、あるいは内大臣の邸宅。

あこ||我が子。若君を指す。

明日とての日||いよいよ明日という日。

小車||玩具の車。

問一 傍線部(1)(2)に述べられている中将の思いを、それぞれわかりやすく説明せよ。

問二 傍線部(3)を、各文の主語を明らかにして現代語訳せよ。

問三 傍線部(4)の「思しなぐさめて」という姫君の思いはどのようなものか、わかりやすく説明せよ。

問四 傍線部(5)(6)は、どちらも若君の言葉である。それぞれ、母親のどのような態度・言葉を、どのように理解して言った言葉なのか、わかりやすく説明せよ。

問題は、このページで終わりである。